

インターネット・出版・図書館

- 電子ジャーナルの普及が教えたもの -

土屋俊 (千葉大学)

2006年10月27日

図書館大会「出版流通分科会」基調講演
岡山市

2003年についての統計では、公立図書館の資料費は354億円であるのに対して、大学図書館の資料費は771億円であり、大学図書館が日本の知的基盤の中核を担うことが明らかである。また大学図書館の資料費のうち「外国雑誌」の購読のための支出は300億円近くに及ぶ。このように大学図書館における最大の関心事である外国雑誌はこの10年間で大半が電子ジャーナル化された。

「電子ジャーナル化」とは、従来は印刷、製本され、定期的に配送された冊子をめくることによって読んでいた論文の内容を、利用者が自分の手許の端末からインターネットを経由するだけでただちに知ることができるようになることを意味する。したがって、手持ち可能端末上で電子ファイルを閲覧するとか、CD-ROM搭載のコンテンツをLAN経由で共同利用するとかというレベルの「電子化」はすでに時代遅れとなってしまった。また、それだけではなく、この電子ジャーナル化によって、これまで「外国雑誌」の流通形態を一新させられることになり、その変化のほとんどは日本ではこの5年間で生じた。このような経験から学ぶことがらがすべて

の情報流通の形態に妥当するとはかぎらないものの、社会全体の電子化にともなって不可避免的に生じる情報流通の変化の重要な側面を示唆するものであることは間違いない。

「外国雑誌」は、1980年代以来、タイトル当たり価格の高騰とそれによるキャンセルの増加の悪循環という北米でいわゆる「シリアルズ・クライシス」の状況にあり、日本でも90年代の10年間で大学図書館による購読タイトル数が半減するという状況にいたっていた。その中で、商業出版社による電子ジャーナル化に対応する大学図書館の世界規模の協力関係に参加しつつ、国立大学図書館を中心に努力した結果、この数年間では支払額一定のまま、飛躍的な情報アクセス環境の改善を実現した。

このことを可能にしたビジネス・モデルは、現在、図書館と出版者との間での共有の認識となったものであり、サイトライセンシング・バンドリング(=パッケージング)・Eオンリー・コンソシアムの4つのキーワードによって特徴づけられる。サイトライセンシングとは、印刷体雑誌の機関購読に相当するものであるが、印刷体がいちどに一人しか利用

できないのに対して、電子ジャーナルは同時に多くの人々が利用することができるという契約になっている。また、このことによってそれぞれのサイトで利用を定量的に測定することが可能となり、情報需要・利用方法についての統計を得ることができる。バンドリング (=パッケージング) とは、出版者の提供する雑誌タイトルをすべてひとまとめに利用する契約をすることであるが、このための費用は、費用対効果を考えたとききわめて小さく設定することになっており、実際、それまで予約購読しなかったタイトルの利用が総利用の3分の1を越えることは稀ではない。その加算費用の一部は、契約をEオンリーとすることによるディスカウントから捻出することが可能である。印刷体の制作頒布に比して電子体のそれが有意に低額でできるという前提で電子体みの価格はリストプライスより低額に設定されることが多い。さらに図書館がコンソーシアムを構成することによって、安定した顧客グループとなることによって、出版者が安定した収入を見込めることを可能とし、また、急速な技術的、制度的変化を吸収することが可能となった。

この結果、現在日本の国立大学のほとんどでは、エンドユーザから見たとき、主要な医・理工系外国雑誌のほとんどが読み放題、プリントし放題になる契約関係を安定的に維持しているといっていよい。

「読み放題、プリントし放題」という環境は、著作権保護に敏感な外国出版者が認めにくそうなものであるが、その外国出版者自身がそのような環境の構築に協力してきたということは示唆的である。すなわち、出版者が創造した知識や情報がより広く、より多く利用されることが、その知識と情報の価値を向上させるという考え方が重要であり、出版者としては、価値が向上した分だけ対価を要求しや

くなるはずである。著作権などにとらわれて、利用を制限することによって収益の確保を図ろうとする考え方は、本質的に間違っているだけでなく、この電子ジャーナルがもたらした成果をみるならば、現実的にも無意味であることがわかる。これからの日本の大学キャンパスにおいては、電子的資料によってこのような環境が実現するのでないかぎり、その電子的資料は導入されないであろう。

たしかに、この電子ジャーナルの経験は、主として医系・理工系の英文雑誌に関するものであるもので、そのまますべての出版流通に適用することは無理かもしれない。しかし、その示唆するところは重大であると考えられる。同時に、このようなモデルの実現によって、情報探究、情報利用の行動そのものが変化しつつあることも指摘することができる。論文のひとつひとつに識別子を付与することができるようになったことを受け、書籍の章ごとの識別子も可能になり、そのことによって、論文単位、章単位で自由に参照関係を記述し、(クリックひとつで)利用できるようになった。ひとつの文献から関連の文献に辿りつく労力が極小化されたと言い得るのであり、このことから、たとえば図書館サービスの形態も大きくかわることが予想される。もし出版流通のマーケットがそのように変わりつつあるならば、当然、そこで成立するビジネス・モデルも変化せざるを得ないことは言うまでもない。